

日本国内をめぐった戦時期慰問舞踊 ——石井みどり舞踊団1941-1945

星野 幸代

導入：戦時期日中のプロパガンダ舞踊概観

中国での抗日舞踊は、当時、中国生まれの現代舞踊家が非常に少なかったため、一つのルートとしては抗日演劇〔話劇〕とともに宣伝活動を行った。楊韜論文の「導入」にある通り、1937年より日本に対する抗議を劇によって宣伝するため組織された移動演劇隊が中国各地に散り、武漢で国民党の宣伝を司る政治部第三庁の下で再編された。その宣伝隊には、東京でモダンダンスを学び、当時中国でその分野の第一人者となっていた呉曉邦(1906-1995)が加わり、舞踊ほか演出をつとめている。呉曉邦は本稿で言及する石井漢と並び称された現代舞踊家・高田せい子、江口隆哉／宮操子の舞踊研究所でバレエとモダンダンス、舞踊理論を学び、中国へ持ち帰り、抗日プロパガンダのための舞踊表現に生かしたのである。呉曉邦が属した演劇隊は、上海から江蘇省の無錫、南京、安徽省の安慶を回って武漢へ至った。呉曉邦はまた桂林などで、子どもたちによる抗日宣伝組織・新安旅行団に舞踊劇を指導している。

もう一つのルートとしては、西洋で現代舞踊を学んだトリニダード・トバゴ華僑・戴愛蓮(1916-2006)が、保衛中国同盟(China Defense League)¹の後ろ盾を得て、香港から抗日舞踊コンサートを開始した。太平洋戦争の勃発によって香港が陥落すると、保衛中国同盟は中国人知識人の集結していた重慶に拠点を移す。戴愛蓮も香港を逃れ、桂林を経由して、既に重慶に来ていた呉曉邦と合流する。戴、呉とその妻である舞踊家・盛婕は、重慶で複数の舞踊コンサートを開いて抗日宣伝の演目を踊るとともに、義捐金を集めた。

それに対し淪陷区では、駐留する日本軍の娯楽と士気高揚のため、多くの日本の舞踊家および舞踊団が慰問公演にやってきた。舞踊はクラシック・バレエを除き、日本舞踊、現代舞踊を問わず、東宝舞踊隊や宝塚歌劇団によるショー形式もあったほか、歌手や漫才、日本舞踊などと合同の慰問公演も少なくなかった。スポンサーは陸軍省やラジオ局、新聞社等であった。日本人舞踊家だけでなく、朝鮮、台湾の舞踊家も占領下の“日本人”として慰問舞踊に加わっていた²。

本稿では、慰問舞踊のうち、日本国内の陸軍病院、軍事工場、地方の劇場その他を巡った石井みどり舞踊団を対象として論じる。

1

保衛中国同盟とは日本と戦う中国人に救援物資を送り、抗日宣伝を支援し報道するため、1938-1942年日本軍侵攻まで香港を活動拠点と舌組織である。1938年結成され、宋慶齡を会長、宋子文を総裁をとし、米国UP通信記者I・エブシュタインが広報を担当する等、欧米人が主要なメンバーを占めていた。

2

本稿「導入」について、詳しくは拙著『日中戦争下のモダンダンス』(汲古書院、2018年2月)をご覧ください。

3

松山樹子(松山バレエ団主催)は1941年の状況を次のように証言している。「世の中がこぞで戦時体制になり、バレエなど踊るだけでも冷たく見られる風潮になってしまいました。」「あるとき軍人が、外国の舞踊を踊るとは何事だといって稽古場にどなりこんできたこともありました」(清水正夫『バレエ白毛女はらかな旅をゆく』講談社、1983年。46、47頁)

4

石井漢『皇軍慰問 北支から中支まで』日本教育資料刊行会、1939年。

5

宮操子『陸軍省派遣極秘従軍舞踊団』星雲社、1995年。早坂隆『戦時演芸慰問団「わらわし隊」の記録 芸人たちが見た日中戦争』中央公論新社、2008年。

6

桑原和美「宮操子の半生と戦地慰問」『就実論叢』41、2011年。6-181頁。

7

後藤康行「戦地に舞う慰問舞踊：戦時下の兵士がみた女性舞踊家たち」『専修史学』(五三)、専修大学歴史学会 2012年、33-55頁。後藤康行は芸能関係の皇軍慰問について、歌舞伎、相撲、舞踊と一連の論考を重ねている。

8

折田泉『憶ひ出』手稿。筆者が閲覧したのは台湾、台北市の蔡瑞月舞踊基金会の所蔵するコピーである。閲覧した限りでは全39頁。頁と頁の間で2、3カ月空いている場合もあり、もともとあった頁が欠落している可能性も残る。

9

前掲『日中戦争下のモダンダンス』では、台湾人舞踊家・蔡瑞月に即して本資料を扱った。

10

石井漢は秋田県出身、帝劇の歌劇部の第一期生としてクラシック・バレエを学ぶが反発し、創作舞踊を編み出す。当初酷評もされたが、山田耕筰や小山内薫らの支持を得て独自の境地を開いた。1922-25年は弟子・石井小浪を伴い欧米を巡業して高く評価され、日本を代表する現代舞踊家としてその地位を確立した。帰国後、石井漢舞踊研究所を開き、その門下では、戦後日本・朝鮮・台湾の舞踊界を担う人材が育った。

はじめに

戦時下の慰問舞踊は1938年頃、陸軍省の依頼、新聞社の後援などを受け、様々な形態の皇軍慰問が奨励されるに伴って始まった。太平洋戦争が勃発すると、バレエは白眼視され³、現代舞踊も人前で踊るためには、国内外の軍事慰問に行くしかなくなった。

芸能関係の皇軍慰問については、戦中に石井漢が体験記を刊行しているが⁴、戦後は永らくまとまった研究も証言もなかった。20世紀の終わり頃から少しずつ証言や記録が出て来ており、舞踊家・宮操子による皇軍慰問舞踊体験記、早坂隆の戦時演芸慰問団ルポルタージュが挙げられる⁵。舞踊に限れば、桑原和美は上述の宮操子の手記を受けて、宮の舞踊家人生における戦時舞踊の意義について論じている⁶。後藤康行は主として石井みどり舞踊団の南洋慰問をとりあげ、それを鑑賞した兵士たちの軍事郵便に基づき、外地での舞踊公演が兵士にもたらした慰問効果を考察している⁷。ただ、国内慰問舞踊に焦点を絞った論考はまだ見られない。

石井みどり舞踊団の1941-45(昭和16-20)年の国内慰問公演について、石井みどりの夫でヴァオリニストの折田泉(1908-1972)が詳細な記録『憶ひ出』を残しているが⁸、従来この資料を全体的に把握した研究はなく⁹、加えて彼に関する情報は石井みどりの手記によるのみであった。本稿はこの石井みどり舞踊団の1941年11月-1945年8月の公演記録を対象とし、その開催場所、スポンサー、舞踊演目を整理し、公演の状況と参加した主要な舞踊家との動向を考察する。付随的に、折田泉について、新資料に基づき若干の事実を明らかにする。こうした資料の分析に基づき、公演の当初の目的あるいは名目に符合する面と、それとは多少ずれた側面、見えてきた別の役割とを提示することを目的とする。

1. 石井みどり舞踊団：日中戦争初期まで

石井みどり(1913-2007)は栃木県宇都宮市日野町の質屋の長女で、本名は五十嵐ハナという。県立宇都宮高等女学校時代に地元で開かれた石井漢(1886-1962)¹⁰の舞踊公演に感銘を受け、卒業後の1929年に石井漢舞踊団の団員募集に応募し、漢の内弟子となった。一年後には漢がペアで踊る際のパートナーに選ばれて「石井みどり」の名を与えられ、石井漢舞踊団のホープであるだけでなく、国内のモダンダンス界を担う一人となった(図1)。1935年には漢門下より独立し要町(現・豊島区)で石井みどり舞踊研究所を始め、1938年江古田(現・中野)に移転し、石井みどり折田克子舞踊研究所として

今日に至る。

石井みどりによれば、舞踊公演に当たっては、夫の折田泉が生演奏を担当するだけでなく、手配からプログラム作りまで全て引き受け、「私は舞台のことだけ考えていればよかったです」¹¹という。

折田泉は、鹿児島出身のヴァイオリニストである。彼の父・折田兼至(1858-1923)は薩摩藩知覧(現・鹿児島県南九州市知覧町)出身の郷士で西南戦争の終盤に加わったこともあり、東京の明治学院を経て1890(明治23)年第一回衆議院議員選挙に鹿児島二区で当選した¹²。立憲自由党の代議士として四期をつとめるが、党との意見の相違により1892年に脱党、帰郷して鹿児島県農工銀行(現・みずほ銀行の前身の一つ¹³)の頭取となった。折田泉は兼至の五男で国立音楽大学卒、アレクサンドル・モギレフスキーに師事し、新交響楽団(現在のNHK交響楽団)で弾くこともあったが、手を痛めて一時は鹿児島に帰っていた¹⁴。彼は帰郷前に、新交響楽団のヴァイオリニスト加藤為三郎率いる加藤カルテットとして活動している(図2)¹⁵。失意の折田泉に、石井漠舞踊団の後援をしていた兄¹⁶が、舞踊に伴奏するヴァイオリニストになるよう声をかけ¹⁷、折田泉は再び上京して漠の舞踊研究所で石井みどりと出会うことになった。

盧溝橋事件の翌春には、石井みどりは他の舞踊家たちと同様、「軍国舞踊」を標榜せざるを得なくなった(図3)。1940年3月より、時局下の興業・娯楽の健全なる発達と向上を名目として、興業と舞台人を許可制とし、警視庁公布の写真入り「伎芸証」を持っていなければ舞台に立てなくなった¹⁸。この伎芸証を交付してもらったため、警視庁主導のもと全国の舞踊家の統制団体である第日本舞踊連盟が結成された。石井漠は現代舞踊部の部長となっている。

石井みどり舞踊団が慰問舞踊を始めたのは、1938年4月から5月にかけて、北京、天津及び満州公演である。国外としてはそのほか、1942年10月-43年2月に南方慰問を果たしている。

3. 石井みどり舞踊団慰問公演1941-1945年

3-1 公演のスポンサーと慰安する対象

石井みどり舞踊団は、北は樺太、南は鹿児島まで、岩手、徳島、愛媛、奈良、神奈川、山梨、静岡、滋賀を除く都道府県を巡っている。国内公演の後援者のうち、明記されているものは次の6つに分類できる。



図1 1936年12月4日『東京朝日新聞』夕刊「競ふ五名花食しき人々に捧ぐ 女流舞踊の夕 廿二日 日比谷公会堂」写真キャプションは次の通り
「真向かって右より石井みどりさん・宮操子さん・崔承喜さん・右下より石井小浪さん・高田せい子さん」



図2 1936年3月4日『東京朝日新聞』
「邦人作曲家の作品を贈る 弦楽四重奏と洋琴演奏 今夜の聴きもの」[ラジオ番組]



図3 1938年1月8日『読売新聞』
「軍国舞踊 空の荒鷲を讀へて 石井みどり
しろがねの翼ならべて空かける
光まぶしき舞をこそおもへ」

11

石井みどり『よく生きるとは、よく動くこと』草思社、2004年、43頁。

12

折田兼至については以下の資料による。前掲石井みどり40頁、久米正章・松永明敏・川崎兼孝『鹿児島近代社会運動史』（南方新社、2005）38-40頁、1897年6月1日「折田兼至氏の脱退申込」、11月6日「薩摩三代議士」『東京朝日新聞』。

13

昭和12年、全国各地にあった農工銀行とともに日本勸業銀行に合併された。日本勸業銀行は1976年第一勸業銀行になり、2002年よりみずほ銀行。

14

前掲石井みどり40頁。

15

前掲石井みどり40頁、76頁および1936年3月12日「邦人作曲家の作品を贈る 弦楽四重奏と洋琴独奏 今夜の聴きもの」『東京朝日新聞』。

16

石井みどり舞踊団が陸軍省の派遣で中国東北部へ慰問公演に行った際、マネージャーを「折田兼才」がつとめていたという。本文「折田の兄」と同一人物かもしれない。ただ前掲折田泉『憶ひ出』には記載がないため、1941年の時点では石井みどり舞踊団から離れていたらしく、それ以上のことは不明である。（1938年5月1日「北支へ“舞踊慰問使”津田部隊のために一さし」『東京朝日新聞』）

17

前掲石井みどり41頁。

18

村松道弥『私の舞踊史 ジャーナリストの回想 上』音楽新聞社、1985年。278-279頁。

A. 大政翼賛に関する機関（順不同）：

産業報国会 愛知県産業報国会（名古屋市）栄町産業報国会
愛知県産業報国会芸能協会
東京産業報国会蒲田支部
大日本航空母の会（航空第二陣母の会）
多治見翼賛文化会・国防婦人会多治見支部
銃後奉公会 軍人援護会

B. 放送・出版メディア機関：

日本放送協会 毎日新聞社 いばらき新聞社 福井新聞社

C. 娯楽・芸術団体

東京興行者協会 日本技芸者協議会 吉本興業部

D. 個人

E. 地方公共団体：荏原区役所

F. 大使館（*「ビルマの夕」のみ後援）

ビルマ大使館、ビルマ協会、日緬佛教婦人会

次に、慰問する対象としては以下の7つに分類できる。なお、「ビルマ独立の夕べ」（1943年12月11日東京、12月22、23日名古屋）や南方慰問報告会等、祝賀目的のもの、また解読不可能であった数件を分類対象から外している。

- (1) 軍隊関係：8公演（1942-1943年）
- (2) 陸海軍病院：7公演（1943-1944年）
- (3) 出征遺家族：3公演（1944-45年）
- (4) 工場・工廠・会社・製作所・業者慰労会・女子挺身隊 54公演（1941、1943-44年）
- (5) 炭鉱：7公演（1943-1944年）
- (6) 地域の人々：235公演（1942-45年）

(1)のうち、軍隊に対する7公演は以下のとおりである。初めの5公演は東京毎日新聞社・銃後奉公会・軍人援護会の共催、近衛航空隊は東京毎日新聞社主催による。

- 1941年 6月2日 市川第85歩兵部隊
- 6月6日 赤羽工兵隊慰問
- 6月14日 世田谷東部第17部隊
- 1943年 6月29日 国府台（千葉県）東部第73部隊
- 7月24日 国府台（千葉県）東部第74部隊慰問

9月20日 東京 調布町 近衛航空隊慰問

12月29日 西大久保(東京)女子大体操場(台湾第一団 志願兵壮行会)

1944年 11月23日 矢板町(栃木県)東部〇〇部隊慰問 矢板女学校¹⁹講堂
武蔵野文化会主催

19

現・栃木県立矢板高校。

(1)に含めたもう1公演は、1942年5月23日「大日本航空母の会」である。この開催地を折田泉は「共立講堂」(現・千代田区の共立女子大学講堂)と記すが、年月日より、この会は『東京朝日新聞』5月24日夕刊に報道された「航空第二陣母の会」に相当すると考えてよかろう。同記事によれば同会は大日本航空婦人会主催、23日午後一時から九段軍人会館で開催された。東京市航空青少年隊員の母や姉、約1,500名が招待され、第一部では母性保護連盟委員長であった婦人運動家・山田わか(1879-1957)による「航空第二陣の母によせて」、東京市航空青少年隊司令による「大空の母の覚悟」という二件の講演が行われた。第二部は日本海洋吹奏楽団の音楽、石井みどり舞踊団の舞踊、映画「空の第二陣」「君は操縦者になれるか」上映であり、一同は「感銘を深くして散会した」という。

本会で、石井みどり舞踊団のプログラムは次の通りであった。

1 祭りの夜 蔡瑞月 小倉忍 青葉かほる 宮重京子

2 野の華 梅津好子

3 空の勇士 小倉忍 蔡瑞月

4 寿代譜²⁰ 石井みどり

5 豊年踊り 石井みどり 蔡瑞月 小倉忍 青葉かほる 宮重京子
永島賢浩

20

前掲村松道弥はこれに「寿代譜(越天楽より)」と記す(43頁)。雅楽「越天楽」か、或いは近衛秀麿が編曲した「越天楽」に近い音楽を使った可能性もある。

石井みどり舞踊団の定番演目(本稿末尾の表参照)に、航空隊を意識して「空の勇士」を加えている。「空の勇士」は1941年9月にビクターレコードから売り出された国民歌である²¹。

(4)、(5)は各都道府県の産業報国会及びその支部の手配の元で、公演してまわったと推測される。産業報国会の発端は、1937年盧溝橋事件後の労働争議を防止して操業率を増加するため、1938年に設置された産業報国連盟であった²²。1939年には、政府は産業報国連盟を国策とし、労組等の勢力を産業報国会の下に封じ込めた。1940年、勤労新体制確立要項の閣議決定後、厚生省のもと大日本産業報国会が設けられた。大日本産業報国会は、大政翼賛会の指揮をうけず独立して産業報国運動を行うという建前であったが、実際には1942年には翼賛会の下部組織となった。地方産業報国組織は大日本産業報国会から比較的独立しており、自主的に活動している名目であったが、

21

1941年9月19日『東京朝日新聞』夕刊、ビクターレコード広告。

22

産業報国会の概要は桜林誠『産業報国会の組織と機能』(お茶の水書房、1985)の、主として1、23-24頁による。

実質的には県産業報国会は県警察部の、支部は地方警察署の支配介入と援助を受けていた。

(4)、(5)に当たる慰問公演のスケジュールが、大抵一日とおかず効率よく組まれているのを見れば、産業報国会が工場、会社を周到に束ねていたことがうかがわれる。1944年には、各地の工場が熟練工不足のため女子勤労挺身隊、学徒隊に頼らざるを得なくなり、さらに空襲で遊休化する工場が相次ぐなど、産業報国会は機能不全に陥った²³。この産業報国会の衰退は、終戦の年、石井みどり舞踊団が工場での公演を1回しか行っていないことにも現れている。

(6)には、実際には工場や会社慰問であったが記録が漏れたものも含まれる可能性はあるが、いずれにせよ、軍隊や軍需工場慰問ではなく、地域の人々のための慰問公演数が圧倒的に多いことが分かる。北海道、東北地方の北部の県、北陸、四国、九州南部等、大都市から遠ざかるほどこうした公演が多い。なぜこれほど広範な地域で、また多くの市町村で石井みどり舞踊団が公演をし得たのであろうか。この公演基盤として考えられるのは、東北をはじめ全国から来ていた石井漢門下生の人脈である。九州方面では、鹿児島の名士であった折田兼至およびその一族の人脈に支えられた可能性がある。

観衆の反応を二つ、折田泉の記録から紹介する。一つ目は1944年10月25日昼間、一行は愛知県豊田市中島航空機の本工場での公演である。当初は以下のプログラムを上演予定であった。

- 1、太平洋行進曲：石井みどり 蔡瑞月 高井良りり子 高根きみ子
- 2、ナンダッタツケナ：折田克子
- 3、熱情²⁴：石井みどり
- 4、夢：蔡瑞月
- 5、ビルマ・プエ：石井みどり
- 6、空の勇士・折田克子
- 7、佐渡おけさ：石井みどり 蔡瑞月 高根きみ子
- 番外 荒城の月：折田忍（ヴァイオリン演奏）
- 8、祭りの夜：石井みどり 蔡瑞月 高井良りり子 高根きみ子

しかし、4番まで演じたところで「観客の整理、困難となり、遂に中止するの止むなき」となったという。公演に予想以上の人が詰めかけたらしく、恐らく工員以外の来場者があったのではないか。同日夜は大府工場（愛知県大府市）で公演を行ったが、こちらは全曲演じることが出来た。

二つ目の例は終戦の三カ月前、5月13日秋田県西馬音内町（現・羽後町）朝日座で行った出征遺家族慰問（登龍会〔不詳〕主催）である。プログラムは次の全三部からなる²⁵。

蔡瑞月が台湾でレパートリーとした。曲はブラームス作曲ハンガリアン舞曲第六番（蔡瑞月口述蕭渥廷整理『台湾舞踏的先知：蔡瑞月口述歴史』財団法人台北市蔡瑞月文化基金会、1998、170頁）。

折田泉によれば、この日折田克子が病気のため「めんこい仔馬」「空の勇士」「ナンダッタケナ」を省略した。

- 1、出せ一億の底力²⁶ 蔡瑞月 小倉忍〔肋膜から復帰〕 高根きみ子
- 2、熱情 石井みどり
- 3、田園風景 蔡瑞月 小倉忍
- 4、白鳥²⁷(石井みどり)
- 5、祭りの夜 石井みどり 蔡瑞月 小倉忍

26
1941年ビクターレコード広告のうたい文句は次の通り。「国民歌謡 大東亜建設の進軍譜! 東日〔東京日日新聞〕・大毎〔大阪毎日新聞〕推薦」1941年1月19日『読売新聞』。

27
曲はサン・サーンズ「白鳥」(折田泉『憶ひ出』)

- 1、太平洋行進曲 蔡瑞月 小倉忍 高根きみ子
 - 2、南の月 石井みどり 蔡瑞月 小倉忍 高根きみ子
 - 3、ビルマ・プエ 石井みどり
 - 4、■〔解説不能〕光 高根きみ子
 - 5、馬來の踊 石井みどり 蔡瑞月 小倉忍 高根きみ子
- 番外 荒城の月 折田忍(ヴァイオリン演奏)

- 1、佐渡おけさ 蔡瑞月 小倉忍 高根きみ子
- 2、真紅のばら²⁸ 石井みどり
- 3、野の華 石井みどり
- 4、夢 蔡瑞月
- 5、寿代譜 石井みどり
- 6、豊年踊り 石井みどり 蔡瑞月 小倉忍 高根きみ子

28
石井みどりの、独立間もない頃からのレパートリー(1936年12月16日「女流舞踊の夕」『東京朝日新聞』)。

このあと、番外として、「西馬音内音頭」を地元の女子青年団八名が踊り、「近来になき賑やかな舞踏会」となり、「慰問の主旨百パーセントなり」と折田泉は記す。上に示した演目の中で戦意高揚や増産促進を謳うものは「出せ一億の底力」と「太平洋行進曲」のみで、プログラム全体での比重は八分の一である。石井みどり舞踊団はそれよりも、むしろ観衆が「賑やか」に楽しむことを目的としていたことが「主旨百パーセント」という言葉からうかがわれる。慰問される側もまた国家総動員のプロパガンダよりも、地元の祭りと直結する娯楽をとして享受していたことがうかがわれる。

3-2 演目：国民歌と映画によるメディア・ミックス

本稿末尾の表は、折田泉『憶ひ出』の記録する石井みどり舞踊団慰問舞踊1941-1945年のプログラムから、各年毎に上演回数の多い順に10演目を取り出したものである。ただ表にもある通り、1941年は11-12月分しか記されておらず、1942年は10月以降南洋慰問に行った分は記録がなく(折田は同伴しなかった)、その他にも記録が欠落している可能性があり、公演の絶対数が少ないため、データとして信頼度が高いの1943年、1944年であろう。

ベスト10に入っているもののうち、「海行かば」²⁹、「愛国行進曲」³⁰、「太平

29
今日では「海ゆかば」が一般的だが折田泉は「海行かば」と表記する。「海行かば」は、「国民の教化動員を目的に上から制定・普及された公的流行歌ともいえる「国民歌」の一つとして、1937年日本放送協会の国民精神総動員運動強調週間放送のテーマ曲、信時潔が作曲(戸ノ下達也、前掲55頁)。しかし、戸ノ下達也の研究によれば、本楽曲が太平洋戦争下の「レクイエム」となったのは、1942年に大政翼賛会がこれを「国民の歌」と指定し、ラジオでの「玉碎」報道のテーマ音楽として採用されるようになって以降であり、「楽曲制定の当初の目的と実際の活用の乖離として留意すべきだろう。」と指摘している。(戸ノ下達也、55-56頁)

30

1937年内閣情報部が懸賞で募集したものの、作詞の当選者を先に決定し、曲は軍艦マーチの作曲者、瀬戸口藤吉が一等の文部大臣賞。(1937年12月20日「愛国行進曲の当選作曲発表 一等はお馴染みの瀬戸口藤吉翁」『読売新聞』)。同年、これを主題歌とし、映画「愛国行進曲」(日活多摩川撮影所、監督・清瀬英次郎)が作られた。(1937年12月29日『読売新聞』広告)

31

横山正徳作詞、布施元作曲「太平洋行進曲」1940年、これを主題歌とし、映画『太平洋行進曲』(新興・東京、監督・曽根千晴)が作られた。(1937年12月29日『読売新聞』広告)

32

軍馬を歌ったサトウハチロー作詞、仁木他喜雄作曲の児童歌謡(1941、コロムビアレコード)で、当時子どもたちに愛唱された(赤座憲久、「日本の児童文学史論(四)」『大垣女子短期大学研究紀要』28、1989、118-128頁、121頁。)

33

1943年1月22日「さあ明るく唱はう 来月上旬・職場へ国民歌唱運動」『東京朝日新聞』。

34

前掲戸ノ下達也、140頁。但し同書によれば、実際に歌唱指導をおこなった演奏家からはこれらの歌の普及度について疑問の声もあがっていたという。

35

1931年2月20日「おけさ行脚」『東京朝日新聞』。

36

1935年10月19日「寿府社交界を“佐渡おけさ”風靡?」『読売新聞』夕刊。

37

工場体操については、佐々木浩雄「昭和初期の工場体操普及について：産業衛生協議会答申と内務省社会局の取り組み」(『龍谷紀要』33(1)、龍谷大学 121-137頁、2011年)を参照した。特に128、135、136頁による。

洋行進曲³¹、「めんこい仔馬」³²は、いずれも1943年から行われた国民歌唱運動のために選ばれた64曲に含まれている³³。この64曲には前節で言及した「空の勇士」が含まれているほか、「村は土から」も、石井みどり舞踊団のレパートリーである。国民歌唱運動とは、「総力戦を戦ふ国民の軍歌にふさわしい健康明朗な歌曲を選定し、その歌唱を通じて戦場精神を昂揚、合わせて退廃的な敵性音楽を一掃しようと」、各地の農漁村や工場に専門家を派遣して、そのために国民の愛唱歌を選定し、歌唱指導するものであった³⁴。

ただし終戦の年には、表のベストテンから「海行かば」が消え、国民歌唱運動に入っている歌としては「太平洋行進曲」と「めんこい仔馬」だけが残る。その他は民謡(「佐渡おけさ」)、伝統行事を表現するもの(「祭りの夜」「豊年踊り」)、童謡、南洋のエキゾチックなものが占めるプログラムは、厳しい戦況のもと慰安の要素を強く出している。

表で、どの年にもベストテン入りしている民謡が、「佐渡おけさ」である。数多ある各地の民謡の中で、なぜ「佐渡おけさ」なのだろうか。実は1930年代初期、佐渡の鉦夫であった村田文三が「佐渡おけさ」をラジオとレコードでヒットさせ、さらに「おけさ行脚」³⁵で全国に広めており、「佐渡おけさ」は既に民謡というよりも流行歌になっていた。『読売新聞』は、「佐渡おけさ」のレコードを「ダンス・レコード」と評しており、歌だけでなく踊りのためのレコード需要が高かったことがうかがわれる³⁶。さらに1939年には映画『佐渡おけさ』(新興・京都、木村恵吾監督)が製作されている。先に挙げた「海行かば」、「愛国行進曲」、「太平洋行進曲」もそれぞれを主題歌として映画の方が後に作られている。石井みどり舞踊団は、当時のメディア・ミックスによって十分に普及している曲を多く上演していたことが分かる。

3-3 工場体操との結びつき

石井みどり舞踊団の公演は、1930年代に既に普及していた工場体操のパリエーションとして受容された可能性が高い。

工場体操とは、1930年代前半から内務省社会局により、工場労働者の心身の健康のために提案されたものである³⁷。単に身体を鍛錬するのではなく、民謡「佐渡おけさ」「木曾節」やその他の音楽、遊戯やダンスを「民謡体操」として採り入れ、労働者の感興に訴えることが奨励された。1938年からは、朝日新聞主催「日本体操大会」にも工場労働者たちが全国50工場から3600人参加し、工場団体連合体操として、「日本産業体操」と「愛国行進曲」を演じたという。

前節で紹介した「佐渡おけさ」の流行は、一つにはこの工場体操に支えられていたと考えられる。以下に、「佐渡おけさ」を「民謡体操」に採用した工場を取り上げた『東京朝日新聞』記事を紹介する。

群馬県前橋市六供町の上毛^{ろっく}燃糸^{しょうも}工場では、「産業戦士」の女工たちに、午前七時半、午後二時、四時の三回、十分間ずつ工場の広場で「佐渡おけさ」に合わせて体操をさせていた。「佐渡おけさ」を使うわけは、一つには本工場が福井県から移転してきたため、女工たちに北陸出身者が多く「故郷へのほのかな思慕を、今、故郷の唄の「佐渡おけさ」がなぐさめて呉れ」るからでもある。二つには、『女工哀史』の通り、従来製糸工場の女工は労働と栄養不足で肺を病む者が多く、それを防ぐためであった。民謡体操で健康になった女工たちは、さらに次の段階を目指している。

昨年十一月八日に本社後援で前橋師範で群馬県体操大会を行った際全工場を代表してこの工場二百名の女工さんが民謡体操を行い「女学生以上に立派だ」と絶賛を博した。

非常時、戦いはこれからの時、いつまでも郷愁の「佐渡おけさ」や「上州小唄」でもあるまいとあって小林指導員が上京してその道の大家について教えを受けた舞踊に体操を加えた「見よ東海の——」の「愛国行進曲」や「国を発つ日の万歳に一」の「皇軍大捷の歌」などの壮快な歌につれ、旭日旗を打ち振る勇ましい民謡体操を行って居る。

他の工場からも視察や、指導を受けに来て居るので、蚕糸工国の群馬、長野県の各工場にも民謡体操は普及されてゆく——（1938年3月28日「伸び行く力 鍛える集団 小旗かざして 嬉しい「民謡体操」 “おけさ” から“愛国行進曲”へ」『東京朝日新聞』）

女工たちの群舞を見た観衆の「女学生以上に立派」という反応から、民謡に合わせた伝統舞踊に近いものでさえ、身体を整然と鍛錬する集団体操は近代的な知として受け取られていたことが分かる。「小林指導員」がわざわざ上京して「その道の大家」に舞踊／体操を習い、他の工場からも視察や学習に来るというエピソードからも、舞踊／体操が伝統的な盆踊りのように見様見真似で身につくものではなく、専門家から吸収すべき知識としてとらえられていたことがうかがわれる。

この記事から、石井みどり舞踊団が工場などで舞踊指導を求められた理由がわかる。さらに、本記事にある上毛燃糸工場は1943年中島飛行機製作所（戦後の富士重工。2017年より「SUBARU」）に売却されたが、翌44年石井みどり舞踊団はこの中島飛行機製作所の「宇都宮工場女工員慰問」を行っている。ここで本記事の女工たちと石井みどり舞踊団の慰問対象とが結びつくのである。その他の石井みどり舞踊団工場慰問において、明確に舞踊指導として記録されているものには、以下の二件（5日間）が挙げられる。

1943年8月22-24日 茨城県日立市 日立製作所舞踊講習

- 1、増産音頭
- 2、村は土から
- 3、瑞穂踊り

指導主任 石井みどり

助手 蔡瑞月 小倉忍 梅津好子

1944年8月16-17日 東京産業報国会蒲田支部

麦刈音頭指導 指導者 石井みどり

助手 蔡瑞月 山崎竜子 高井良りり子 升金ひとみ

これは、工場体操の指導と言い換えても良いであろう。石井みどり舞踊団の慰問舞踊は、モダンダンスという芸術としてではなく、戦時下に尚一層重視される工場労働者の心身の健康のための体操という名目によって、工場経営者からも歓迎されたと考えられるのである。

38

戦後谷桃子バレエ団を設立した谷桃子(1921-2015)の本名である。谷桃子は戦中、主として日劇ダンシングチームで活躍したが、もとは石井漢の最初の踊り相手・石井小浪の門下生であったこと、また彼女が自ら慰問舞踊に加わったと述べていることから、「上田桃子」は谷である可能性が高いと考えられる。(文園社編集部『バレリーナへの道 バレリーナ谷桃子の軌跡』文園社2006、13頁。)

39

1942年第4回東京新聞舞踊コンクール一般部第二部(日本舞踊 教育舞踊)準入選者の一人。

40

1939年『スタイル』(スタイル社)美容記事「美貌は一杯の水から」のイメージ写真として、石井漢舞踊体育学校の石垣初枝、古屋睦子とともに、恵良八重子のグラビアあり。戦後は九州の舞踊普及に貢献。

41

戦後、日劇バレエ科専任教授。現在の越智インターナショナルバレエ(名古屋)創始者・越智実らを育成。

42

現在も古森美智子バレエ団研究所主催(福岡県福岡市)。

43

日劇ダンシングチームのダンサー(『日劇ダンシングチーム・アルバム』創刊号、東宝宝塚劇場、1938年1月『日劇ダンシングチーム・生徒連名簿』)。

3-4 参加した主要な舞踊家

石井みどり舞踊団1941-45年公演に参加した舞踊手は28名であり、全400回を超える公演をこなした人数としては多いとはいえない。期間の全参加者名と、年度ごとのメンバーを以下に示す。

●1941-45年公演舞踊手名簿(五十音順) 28名

青葉かほる 五十嵐實 石井みどり 上田桃子³⁸ 梅津好子³⁹ 小倉忍
折田克子 寒水多久茂 貫洞昌子 金海星 恵良八重子⁴⁰ 小池博子⁴¹
古森美智子⁴² 蔡瑞月 斉藤敦子 斎藤ふじ子 杉本春子 高井良りり子
高根きみ子 戸田政子 永島賢治 福井房子⁴³ 升重ひとみ 宮重京子
元田初實 森幸枝 山崎竜子 渡辺つや子

●以下各年別

○1941年 9名

五十嵐實 石井みどり 上田桃子 梅津好子 小倉忍 金海星
古森美智子 蔡瑞月 福井房子

○1942年 13名

青葉かほる 五十嵐實 石井みどり 梅津好子 小倉忍 金海星 小池博子
古森美智子 蔡瑞月 永島賢治 升重ひとみ 宮重京子 渡辺つや子

○1943年 20名

石井みどり 梅津好子 小倉忍 折田克子 寒水多久茂 貫洞昌子
古森美智子 小池博子 蔡瑞月 斉藤敦子 杉本春子 高井良りり子

戸田政子 永島賢治 福井房子 升金ひとみ 元田初實 森幸枝

山崎竜子 渡辺つや子

○1944年 17名

石井みどり 梅津好子 小倉忍 折田克子 寒水多久茂 恵良八重子

古森美智子 蔡瑞月 斎藤ふじ子 杉本春子 高井良り子 高根きみ子

戸田政子 永島賢治 升金ひとみ 森幸枝 山崎竜子

○1945年 5名

石井みどり 小倉忍 折田克子 蔡瑞月 高根きみ子

全期間を通じて出演していたのは石井みどりを除けば蔡瑞月、小倉忍の二名のみである。蔡瑞月は全公演に参加、小倉忍は折田泉の44年9月30日の記述によれば肋膜炎を病み、半年ほど休演したが、戦後も石井みどり舞踊団で踊り続けた⁴⁴。蔡瑞月(1921-2005)は台湾の台南出身、石井漢に学んだあと石井みどり舞踊団に加わった⁴⁵。戦後は台湾に戻って蔡瑞月舞踊芸術研究社を立ち上げ、台湾現代舞踊の重鎮となった。現在も台北の蔡瑞月舞踊研究社では彼女を記念する舞踊シーズンが例年開催され、石井みどり折田克子舞踊研究所との交流が続いている。

メンバーのうち出自が分かっている舞踊家を分類すれば、石井漢の門下生(古森美智子、小池博子、恵良八重子、寒水多久茂、小倉忍、蔡瑞月)が殆どを占める。恐らくその他のメンバーも殆どが石井漢にゆかりのある舞踊手であろう。その他、日劇ダンシングチーム系の舞踊家(上田桃子、福井房子)がいるが、上田は本来、石井小浪の弟子であった。折田克子、杉本春子は若い踊り手で、石井みどり舞踊団で初舞台を踏んだ。高根きみ子は慰問で歌も披露しており⁴⁶、戸田政子⁴⁷も含めて、ダンスと歌を共に訓練された少女歌劇系の舞台人であった可能性がある。

数少ない男性舞踊家で当時一定の評価を得ていたのは寒水多久茂である⁴⁸。彼は石井みどりと同年に石井漢に入門し、1937年にソロ公演を行って石井漢から独立していたため、石井みどり舞踊団の新聞広告でも「賛助出演 寒水多久茂」と特記されている⁴⁹。彼は1945年初めに召集されるが無事に復員し、息子の寒水征矢夫(寒水ダンシングファクトリー)は日本民族舞踊家として多くの舞踊家を育成した。

総じて、クラシック・バレエやダンシングチームといった呼称が許されず、ソロでのリサイタルはありえなかった時代、本来表現方法が異質な舞踊手たちが、踊り続けたい一心で石井みどりの慰問舞踊に集っていたと言えよう。彼らは戦後それぞれの道に散りながらも、多くの後進を育てている。

44

1949年第6回東京新聞舞踊コンクール現代舞踊第一部准入選者の一人。同年、折田克子が現代舞踊第二部の第2位。

45

蔡瑞月については前掲『日中戦争下のモダンダンス』第二章で戦中・戦後を中心にまとめた。

46

1945年4月20日北海道門別町での公演プログラムには「秋田おぼこ 高根きみ子(独唱)」とある。

47

オペラ歌手工西美穂氏の師である歌手・戸田政子氏(2013年の時点で88才。広島県三次市出身)と同一人物と思われる。
<https://miho-kunishi.jimdo.com/2013/10/26/> 戸田政子先生の門下生によるコンサート開催/
2017年12月23日アクセス。

48

前掲村松道弥、243-244頁。

49

1943年2月9日「ビルマの夕 石井みどり舞踊公演」『読売新聞』広告。

4. 結び

50

戸ノ下達也『音楽を動員せよ 統制と娯楽の十五年戦争』青弓社、2008年。258頁

戸ノ下達也は、戦時流行歌には国家総動員に应じるタテマエと、慰安や心のより所を娯楽に求めるホンネとが入り混じる様を、「ねじれて」いた⁵⁰と称している。これと同様の現象が石井みどり舞踊団のプログラムにも見出せる。冒頭でこそ「海行かば」や「太平洋行進曲」を踊るが、あとは大政翼賛的メッセージが顕著ではない踊りのラインナップなのである。

石井みどり舞踊団1941-1945年慰問舞踊は、当初は主として産業報国会の手配で行われていたが、終戦が近くなるほど後援なしの地方公演を主とするようになった。歩兵部隊、航空隊、また陸海軍病院慰問もこなしたが、その回数は少ない。圧倒的に多いのは比較的都会から遠方の地域の、軍関係でも工員でもない一般観衆相手の公演であった。二番目に多いのは各種工場である。工場での慰問舞踊は、1930年代から国民体育の一環として普及していた工場体操のバリエーションとして、工員に受け入れやすかったと考えられる。またそうした需要によって、舞踊手たちは戦時下の舞踊を正当化することができた。上演されたプログラムの演目を見れば、ラジオ、レコードと映画によって流行歌となっていた国民歌を要所に組んでいるものの、西洋音楽や「佐渡おけさ」など大政翼賛的ではない音楽、舞踊を同等に盛り込んでいた。日本の敗色が濃くなるにつれ、後者の比重が多く、より慰安が主となっていった。

総じて、石井みどり舞踊団の戦時下の慰問舞踊は、戦時下国民体育としての工場体操と結びつき、大政翼賛のプロパガンダを最前面に立てつつ国民の娯楽と健康を担い、また戦後文化の即戦力となる舞踊手たちを保護したといえよう。

	1941(昭和16) *記録11-12月のみ	上演 回数	1942(昭和17) *記録1,3,5-6,10月のみ	上演 回数	1943(昭和18)	上演 回数	1944(昭和19)	上演 回数	1945(昭和20) *記録4,5,8月のみ	上演 回数
1	祭りの夜	13	寿代譜	13	祭りの夜	126	豊年踊り	128	太平洋行進曲 熱情 めんこい小馬	39
2	佐渡おけさ	12	豊年踊り	12	寿代譜	124	太平洋行進曲	118		
3	野の華	11	愛国行進曲	11	海行かば 佐渡おけさ 豊年踊り	123	ビルマ・プエ 祭りの夜	104	田園風景 祭りの夜 ナンダッタッケナ ビルマ・プエ 馬来の踊 佐渡おけさ 真紅のぼら 豊年踊り	38
4	出せ一億の底力	10	佐渡おけさ	9			佐渡おけさ	102		
5	寿代譜	6	野の華	7	ビルマ・プエ	122	馬来の踊	101	寿代譜	97
6	真紅のぼら	5	嬉しい日傘	6			熱情	120		
7	豊年踊り	5	熱情	4	熱情	120	田園風景	95	馬来の踊 佐渡おけさ 真紅のぼら 豊年踊り	38
8	惜春	4	惜春、白鳥	3			惜春 南の月 田園風景	116		
9	田園風景	3	壁画より、伽藍、 青白い月、 真紅のぼら		3	海行かば			87	
10	瑞穂踊り 白鳥	2					祝ビルマ独立	83		

表 石井みどり舞踊団慰問舞踊1941-1945年：上演回数ベスト10(年毎)

*折田泉『憶ひ出』に基づき筆者作成